

立教大学学術推進特別重点資金 (立教 S F R)
 大学院生研究
 2011年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	文学研究科	日本文学専攻
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	文学研究科・日本文学専攻 博士課程前記課程2年	長谷川 奈央 印	
指導教員	所属・職名	氏名	
	文学部文学科日本文学専修・教授	小峯 和明 印	
自然・人文・社会の別	自然 ・ <input type="checkbox"/> 人文 <input checked="" type="checkbox"/> ・ 社会	個人・共同の別	<input type="checkbox"/> 個人 <input checked="" type="checkbox"/> ・ 共同 名
研究課題名	近世における『宇治拾遺物語』の受容と再生		
研究組織	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	文学研究科・日本文学専攻・前期2年	長谷川 奈央	
研究期間	2011	年度	
研究経費	200	千円	

研究の概要 (200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、鎌倉初期成立の説話集である『宇治拾遺物語』が、近世にはどのように受容・再生されたのか探るものである。説話集研究において通常とられる手法である、同時代の類話や依拠資料との比較ではなく、近世に作成された改編作品の分析を通して研究を進める。『宇治拾遺物語』は中世に成立を見るが、盛んに受容されるようになるのは、古活字版、またそれに続く万治二年(一六五九)の絵入り版本出版後のことである。近世の出版以降の受容の状況を見ずして、『宇治拾遺物語』の受容と再生を解き明かすことはできない。したがって、本研究では近世期の改編作品について研究する。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[説話集] [抜書] [書入]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

昨年度までに、『宇治拾遺物語』に関する先行研究を整理し、近世に作成された『宇治拾遺物語』抄出・改編作品の分析を通して、近世における受容と、読者による作り変え(再生)の様相を探ることを、研究課題として設定した。

さらに、抄出・改編のレベルによって近世期の作品を、{A 版本、B 抜書、C 絵巻・絵入り写本(本文改変なし) D 改編(本文改変なし) E 改変(本文改変あり)、F 絵巻・絵入り写本(本文改変あり)、G 目録}に分類したうえで、現存作品を整理した。そうした昨年度までの研究成果を踏まえて、本年度は下記項目について検討した。

1. 抜書の話題選択基準の検討

B 抜書に分類した資料 {①国立公文書館蔵『宇治拾遺物語抜書』、②宮内庁書陵部蔵『宇治拾遺抄』、③名古屋大学小林文庫蔵『宇治物語』、④名古屋大学小林文庫蔵『宇治拾遺物語書抜』、⑤『宇治拾遺物語抄』}の説話選択の基準について検討した。抜書間に共通する傾向と、各伝本の選択の特徴を明らかにした。

①②はともに「日本」の話題が意識されている点で共通しているが、①では外国の話題を避け、②では外国で日本の人が名声を得る話題を取り入れている。共通する編纂意識に基づいていても、説話集編纂の方法は異なっている。④では、抜き出される話題すべてに「食」に関わるモチーフが含まれている点から、『宇治拾遺物語』にはその種の話題が多いということを指摘した。これにより、抜書の分析によって『宇治拾遺物語』そのものの特徴を照らすことが可能になるということを示すことができた。

2. 本文省略方法の検討

国立公文書館蔵『宇治拾遺物語抜書』の本文省略方法について、本文の抜き出し方を四つの型 {①説話全体から話素を抄出、②説話の一部から話素を抄出、③話素を省略して抄出、④ほぼ全文を抄出}に分類して特徴を指摘した。また、本文省略方法の特徴や、装丁等の形態的特徴から国立公文書館蔵『古今著聞集抜書』が同一の編者の手によるものであることを新たに発見、共通点を指摘した。『古今著聞集抜書』の調査を行い、併せて全文の翻刻を発表した。旧内閣文庫には他に『軍記抜書』なる資料が蔵されており、国学を学ぶ者への教材として抜書が作成されていた可能性のあることが明らかになった。

3. 書入の分析

名古屋大学小林文庫蔵『宇治拾遺物語書抜』の書入から、校合や注釈に使用された本の書名、さらに可能なものについては、どの版であったのか、誰が所蔵していた本であったのかを確認した。結果、当資料が国学者(狩谷掖斎、屋代弘賢)のあいだで説話集の貸借が行われていたことを示す重要な資料であると確認することができた。

説話集注釈に地誌が用いられていたことを示し、近世には説話集と地誌が同次元の資料として扱われていたとする説について補強した。

本文校合および注釈の研究には国学者書き入れ本 {①今井似閑書入本、②石川雅望書入本、③大石千引書入本、④小林歌城書入本、⑤山崎美成書入本、⑥加納諸平書入本、⑦久米幹文、⑧佐藤有藤その他書入本}の検討が必要であると指摘した。

4. 地誌への引用の検討

既発表論文「繁昌神社と長門前司の女—『宇治拾遺物語』第47話の生成と再生—」(「電通育英会大学院奨学生研究報告集」第4号、2011年3月)をもとに、『宇治拾遺物語』と近世地誌の関係について考察した。近世地誌には万治二年絵入り版本の『宇治拾遺物語』が引用されていたこと、引用に際して、ときに本文書き換えが施され、改変された本文が引用されることでまた『宇治拾遺物語』の本文が変化してきたことを具体的な例をもって示すことができた。

研究成果の概要 つづき

5. 万治二年版本の分析

『宇治拾遺物語』受容史研究において重要な位置にある万治二年版絵入り本について、構成・書誌・挿絵の面から検討を加えた。構成については、無刊記古活字版および写本写本系との比較対照表を作成した。

万治二年版の版木が江戸時代を通して繰り返し使用され、他の版を見ないことの原因について、書肆である出雲寺和泉掾が江戸の出版において力を持った存在であったことを一要因として指摘した。挿絵は絵画化される要素、構図等が近似しており、後発の説話集『昔物語治聞集』に影響を及ぼした可能性があることがわかった。

6. 『昔物語治聞集』の分析

『宇治拾遺物語』と『古今著聞集』から説話を抄出し、貞享元年に版行された説話集である『昔物語治聞集』について、構成上の特徴や説話選択の面から検討した。

説話集の構成に関して、各巻ごとの説話表題および典拠、挿絵の有無の一覧表を作成し、巻之一の一部には連想契機を記した説話連絡表も作成した。これにより、二作品から話題をとりながら『昔物語治聞集』という一貫した説話集としてまとめるにあたって、連想契機によって説話を結び付ける工夫がなされていたことが実証できた。また、各巻ごとに編纂の主題が設定されている可能性を指摘した。

さらに、『古今著聞集』からの説話選択の傾向を探るために、『古今著聞集』からの抄出本である {①『昔物語治聞集』、②『古今著聞集抜書』、③『宇治拾遺抄』} が各巻から何話の話題を抜き出しているかを一覧表にまとめ、分析した。その結果、『昔物語治聞集』では怪異と信仰に関する話題が好んで抜き出されていることが明らかになった。

7. 『籠耳』の分析

『宇治拾遺物語』を踏まえて作成された近世の仮名草子である『籠耳』について検討した。はじめに具体的な表現から、『籠耳』が『宇治拾遺物語』を前提にして作成された作品であることを証明した。次に、両作品の比較から、『籠耳』が近世の作品として『宇治拾遺物語』を作りかえるにあたってどのような点に留意していたのかを検討した。

8. 南方熊楠書入本『逸著聞集』の分析

『宇治拾遺物語』の改編作品として知られる『逸著聞集』のうち、従来未紹介の伝本で、かつひろく知られる粘菌や民俗学の研究者である、南方熊楠の書入がある伝本の翻刻紹介、および書入の分析を行った。書入で指摘される書名の特定、ならびに実際に熊楠が参照していたテキストの確認（これらの資料への書入も調査・検討を加えた）から、どの要素に反応して何の文献を引いていたのか考察した。これにより近代の読者である熊楠が『宇治拾遺物語』改編作品をいかなる関心をもって読み解いたのか、具体的な一例を示すことができた。

以上が 2011 年度の研究成果である。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

①長谷川奈央「名古屋大学小林文庫蔵『宇治拾遺物語書抜』解題と翻刻」(「立教大学大学院日本文学論叢」第11号、2011年8月、p16-48)